

多額のご寄付をいただき ありがとうございます。
厚くお礼申し上げます。

寄付者報告第13号 ● 15. 4. 1～16. 3.31

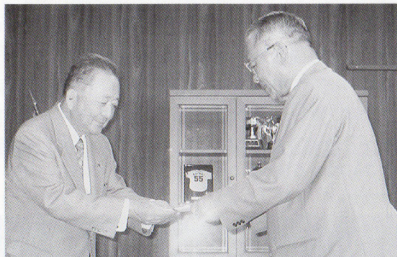
篤志寄付

高鍋町	坂本 守	高鍋町	篠原 清子
々	館野 キミ	々	高鍋SSグループ
々	糸井 一雅	忌明寄付	
宮崎市	印刷センタークロダ	高鍋町	日野ミドリ
川南町	原田 安政	々	黒木 寿子
高鍋町	株式会社 増田工務店	々	小澤 房江
々	合資会社 黒木 本店	々	緒方 義光
々	今村 稜子	々	後藤 秀夫
々	藤間亀舟社中		

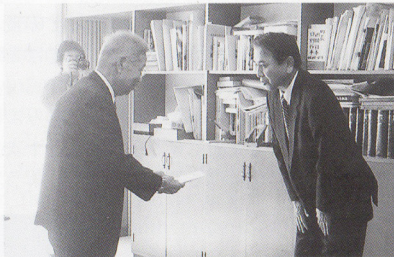
寄付者報告第13号 ● 16. 4. 1～16. 12.10現在

篤志寄付

高鍋町	立正佼成会高鍋支部	糸井 一雅	高鍋町	税田 格十
々	館野 キミ	黒木 清範	々	黒木 敏之
東京都	鍋島 宏子	合資会社 黒木本店	宮崎市	藤井 慶一
々	津上 和子		千葉県	柏女 霊峰
々	石本 民子		高鍋町	藤間亀舟社中
高鍋町	尾崎 一男		々	金田 佳成
々	長尾 輝	忌明寄付		
々	株式会社 増田工務店	高鍋町	河野佐和子	
宮崎市	大園 英華	々	黒岩 健郎	
川南町	葉田留理子	々	杉田イヨ子	



黒岩健郎氏より忌明寄付として石井十次顕彰会へ贈呈される。



増田工務店社長増田秀文氏より石井十次顕彰会へ寄付金が贈呈される。

あとがき

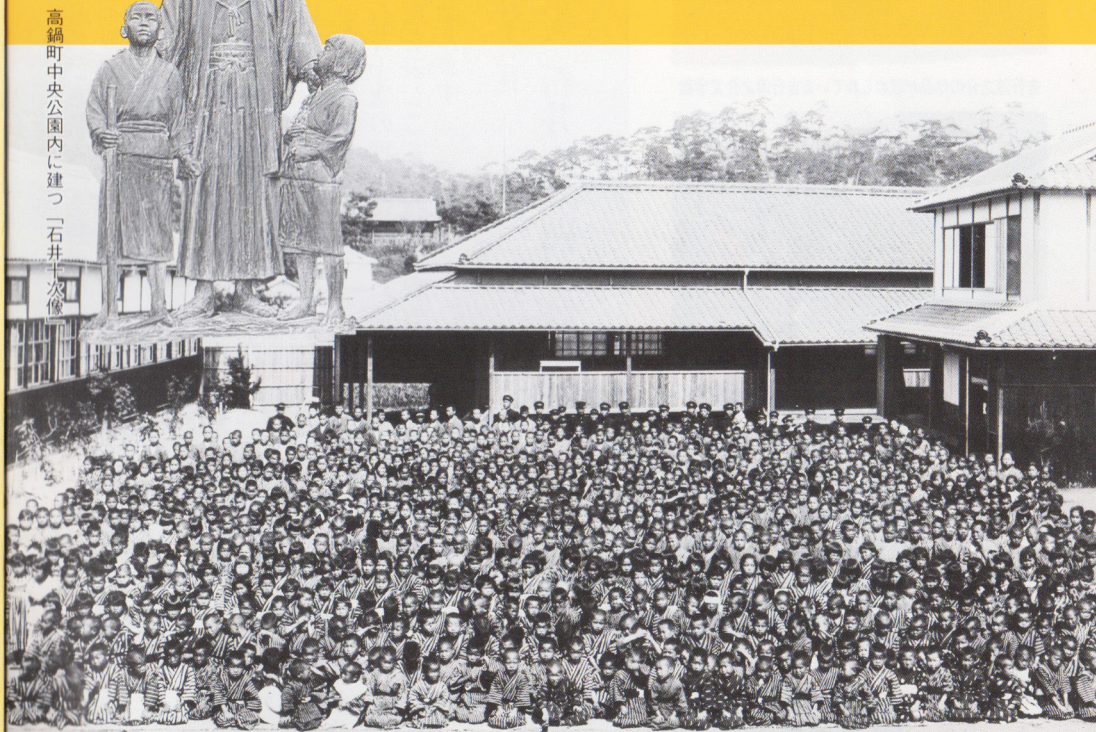
「世界の平和と明るい生活」の願いも空しく、平成16年はイラクでの犠牲をはじめ相次ぐ台風の被害、中越地震と暗い出来事の多い1年でした。罹災者の方々へ心からお見舞い申し上げます。1日も早い復興をお祈りいたします。
「石井十次顕彰会だより」第13号をお届けいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

財団法人 石井十次顕彰会

〒884-0006
宮崎県児湯郡高鍋町大字上江1138番地
TEL 0983-23-4312

石井十次顕彰会だより

第13号



1200人余りの孤児で一杯の岡山孤児院(明治40年・西暦1907年)

財団法人 石井十次顕彰会



受賞後の記者会見



吉行淳之介の作品が収められている吉行淳之介文学館



園児全員の作品が展示されているこども美術館



ガラス工芸に取り組む園児



織物に熱中する中等部の園児



絵に熱中する高等部の園児



園児全員で取り組む創作ダンス

平成四年の第一回石井十次賞（北海道家庭学校）以来、第十三回（宮城まり子女史）となり、平成十六年四月十三日に、その贈呈式を行いました。併せて、当日会場で発表された小中高校生の文章をお届けします。

第13回石

井十次賞

を抱き締めながら心の温もりを伝え慈愛に満ちた経営に職員共々努力してこられました。特に園児の絵画へのいざないは他に見られないような能力の育成につながったものと言えます。四十年にわたる苦難の経営の軌跡を経て今ここにすばらしい開花の時を見るねむの木村の学園の経営は入園している五十余名の子どものたちの安住の楽園となっています。このことは、正に石井十次の理念に沿った偉業であり心から敬意を表しここに石井十次賞を贈りその功績を讃えます。

平成十六年四月十三日

財団法人 石井十次顕彰会

石井十次賞 ねむの木学園園長 宮城まり子様

あなたは、女優として数々のすばらしい賞を受け恵まれた職業にありながら、心身に障害のある子供との出会いがもとで、その職も捨て私財をなげうって児童救済への道にはいらねむの木学園の設立に尽力されました。その間数多くの障害児を引き取られ個性を尊重し一人一人の能力を最大限に引き出して喜びにあふれた生き方を教え育み能力に応じた技能を身につけさせることをねむの木学園の教育方針として貫かれてこられました。学園での日常生活では母親役として一人一人



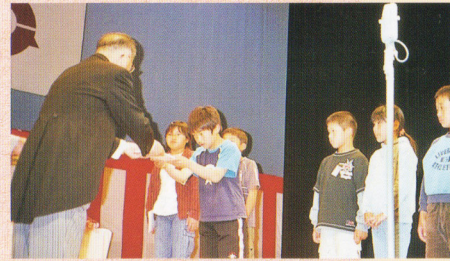
石井十次賞贈呈式
税田理事長より賞状を宮城まり子女史へ



盾を手にして喜びの宮城まり子女史



第13回石井十次賞
選考経過を報告する上村一選考委員長



「石井十次小伝」を小学5年生に贈呈



ねむの木村入り口の壁に描かれた園児作のタイルのモザイク絵



ねむの木学園の正面玄関



石井十次生誕記念式典
フラエンコールなでしこによる石井十次の歌

「第13回石井十次賞」受賞者紹介

「第13回石井十次賞」候補者募集を、平成15年12月末を期限として全国都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会及び個人推薦人にお願ひしました。その候補者のうちから、平成16年2月20日、東京都において、選考委員会を開催し、審査の結果下記の者に決定しました。



学校法人 ねむの木学園 園長 宮城まり子様

住所 静岡県掛川市上垂木あかし通1丁目1番地
TEL 0537-26-3900 FAX 0537-26-3910

【受賞者紹介】

宮城まり子氏は女優としての華々しい実績を積み上げられ昭和33年には、「芸術祭賞」翌34年には「第4回テアトロン賞」など数多くの権威ある賞を受賞するなどの功績があったが、1985年（昭和33年）婦人公論の「まり子の社会見学」の取材でたまたま知恵おくれの子供との出会がきっかけで、演劇でも障害児の役を演ずるなどするなかで急速に障害児たちの教育に対する関心を深めて行かれたようである。身体に障害のある子供たちが家庭に恵まれない子供との学校教育と生活の場が与えられておらず法的な制度も十分なものでないことなどを知って多忙な女優活動のかわら障害児に対する勉強を始めた。

障害児の出会いから、これがきっかけとなって私財をなげうって静岡県浜岡町に土地を求めて施設建設を進め1968年（昭和43年）に社会福祉法人ねむの木福祉会を設立し12名の障害児からスタートしている。後に学校法人「ねむの木学園」を設立“やさしくね、やさしくね、やさしいことは強いよ”を合言葉に障害児一人一人の個性を大切にすることを目標にした楽しい生活環境づくりにも園長を中心に職員や子供たちが一体となってねむの木村での生活が営まれている。施設も1997年（平成9年）に浜岡から掛川市の現在地へ移転し施設の拡充がなされている。

学園の子供たちの文化、芸能活動も個々の能力と個性に応じた指導に徹しておられ、個人個人がそれなりの能力の限界に挑める指導上の配慮と工夫がなされていてその集中力はすばらしいものがあり音楽活動や絵画、手芸などに現れている。

宮城まり子氏の障害児教育への思いは、政府にたいしても障害児教育に対する制度改革のためにも大きな働きかけをしており、全国養護施設の子供たちの高校進学、大学進学や施設職員の処遇改善等の実現を果たして社会福祉界全体の充実のためにも貢献しておられる。

また、障害児への理解を図るための映画にも自ら監督として製作に当たり「ねむの木の詩」を監督製作し、後に厚生大臣賞を受賞し障害児理解に貢献しておられる。製作された映画5本、この他「ねむの木こどもたちとまり子美術展」を国内、国外各地で開催され回数も87回を数える。コンサートやシンポジウム等数多く開催されている。

出版された図書も30数冊に及び受賞歴も36回にわたっている。

40年もの間、障害児教育に全身全霊をなげうって邁進されており、障害児教育の理想郷はかく有るべきものだというものを追求されながら今54名の子供と共に生活され「おかあさん」としての存在価値は子供一人一人にとって偉大な母親となっている。

平成9年大人のための身体障害者療護施設を創設、現在ねむの木村には、美術館、文学館、喫茶室等の文化施設が増え、福祉と文化の村づくりを進めている。



尊敬する石井十次先生

高鍋東小学校 5年 江藤慶太

ほくが石井十次先生のしょうぞう画を初めて見たのは、保育園のころです。それは、日新保育園の玄関に大きくかざってありました。でもそのころは、十次先生がどんな方なのか全く知りませんでした。しょうぞう画の下に「何とかのおび」と書いてあったのを覚えています。字がまだ読めてなかったのです。十次先生のことが分かったのは、東小学校に入ってからです。「何とかのおび」は、十次先生の有名な「なわのおび」の話であることを知りました。そして十次先生は、孤児救済のために全力をつくされたやさしい方だということも学びました。ほくは、学校で毎年、十次先生のことを勉強するたびに、もっとくわしく知りたいと思うようになりました。それで、十次先生の伝記を読むことにしました。

ほくは、三千人にもおよぶ孤児を救済されたのは、石井十次先生の強い意志だと、読みながら思いました。それは、石井十次先生の「いろいろなことに挑戦し、やりとげるまであきらめない。」という性格です。医者というめぐまれた仕事をあきらめて、当時としてはめずらしい孤児を救う仕事に一生をささげられたのは、固い信念があったからだと思います。また、十次先生は孤児と孤児院のためにいろいろな種類の仕事を手がけられました。ほかの人が「おやめなさい。」と注意したのに、「ふつうの人がしないことを大たんにしなればだめだ。」という十次先生の言葉が、ほくは心に残りました。そして、苦しいめに何度もあつたけど神に祈ってみんなで協力しながらそれをのりこえていくところもほくは感動しました。

また、十次先生は感しゃの気持ちをしっかりとっている方でした。いつも、きふ金や品物がとどくと喜びの声をあげて、心から感しゃして受けとられたそうです。感しゃする心が孤児達や周りの人の心をやさしくかえていくところがすごいなと思いました。

ほくは、十次先生のことを知れば知るほど、この町、高鍋町に生まれたことをほこりに思います。

十次先生の強い意志とやさしい心、この二つを見習って、ほくもこんなやさしい人になりたいです。





強い精神力

高鍋東中学校 3年 竹森 洸平

自分が、[石井十次]という名の人物を知ったのは小学校3年生ぐらいの時、当時は、「何をした人なんだらう。」とただただ疑問を浮かべるだけでした。ですが、事あるごとに石井十次先生の名が出て、何を行った人物なのか調べると、さまざまな真実を知り、日本中いや世界的にも名を轟かせた理由がよく分かりました。その真実の中には、驚異的な行動は勿論ありましたが、疑問を抱いてしまう様な真実中にもありません。

石井十次先生が7歳の頃の出来事で歌にもありますが、母の手織りの大切なつむぎ帯と友達がいじめられている原因であった縄の帯とを交換してあげた事がありました。7歳の男の子が友達のために帯を交換してあげるといのは、本当に「凄い」の一言です。普通の子供なら、恐らく声をかけることも難しいことでしょう。今の自分でも、この事を容易には出来ません。つまり石井十次先生は、7歳にして15歳とほとんど変わらない精神の持ち主だったのだと僕は考えます。

疑問を抱いてしまった石井十次先生の行動は、6年間も学んだ医学書を全て焼き払い、医者になる前に医学校を退学し、孤児救済の道を選ばれた事です。なぜせつかく志していた医者への道を捨て、孤児救済の道一本に絞ったのでしょうか。孤児救済をしたいのであれば、医者と同立させればよい事だと思うし、医者になってお金を集めてから、医者をやめ、孤児救済の道に進んでいけばいいとほくは思うからこの行動には疑問を抱いてなりません。しかし小説の中にはこう書いてありました。{人は二主に仕うる事能わず}という言葉に感動し、「医者を目指す者は他にも数多くいるが、孤児を救おうとする者は少ない。例えどのような苦難があろうとも、孤児救済に生涯を捧げよう」と決意されたそうです。「人は2人の主に仕えることは出来ない」という聖句にふれるまでは、1年半もの間悩み続けたとの事です。医者になる目前の人が突如孤児救済のため生涯を捧げようとする人は当時は勿論、現在でも恐らく、いないと思います。石井十次先生がどれほど偉大な方かがよく分かる27歳の時の出来事です。

その後、岡山孤児院を初め、一時は1200人を超す大家族となりました。食糧が減って足りない時は、見ず知らずの子に対してでも自分の食事を与え、自分は絶食を始めたこともあったそうです。

最近、石井十次先生のような精神力を持っている人は少なくなってきている傾向にあると僕は考えます。人の為、友達の為に自分を犠牲にする事が出来るでしょうか。本当の親友であれば自分を犠牲にする事も出来るだろうけど、見ず知らずの他人の為に自らを犠牲にする事は今の僕には不可能です。だから、石井十次先生の偉大さが改めて思い知らされました。

少子高齢化が進む日本。このまま発展していけば、高齢者を介護する人も徐々に減っていくでしょう。こんな時代だからこそ大切なものが、石井十次先生の持っていた[相手を思いやる気持ち]だと思っています。この気持ちを持っていれば、友人や他人、お年寄りの方も自分の手で救う事が可能になってくるのではないかとおもいます。

僕は、昔石井十次先生が実在したこの高鍋町で生まれ育つことに感謝し、今の自分からよりよい自分を見つけ出すため、これまでの行動を見つめ直し、先生が持っていた強い精神を抱き、自分の為、人の為、日本の為、地球の為に自分が出来る精一杯の事をやっていこうという決意を生む事が出来ました。



石井十次先生に学んで

宮崎県立高鍋農業高等学校 3年 北山 将稔

私は現在、高鍋農業高校の畜産科で学んでいます。実家を離れて、寮生活をしながら、今までの2年間いろいろなことが勉強になりました。寮では、今まで親にたよっていたことを全て自分でしないといけなくなるので、自主性が身に付いたと思います。また、時間や寮内の規則を守ることの大切さ、先輩など目上の人に対する言葉使いなども身に付けることができました。授業では、普通教科はもちろんですが、家畜の餌となる飼料作物、畜産経営についてなど専門教科も学ぶことができました。今は主に、実習を通して、牛や豚、鶏などの家畜について実践的に学んでいます。特に、農業クラブ活動での養豚についての勉強はとてもやりがいがあり、楽しいです。現在「ふすま給与による豚の育成改善」というテーマで研究をしています。学校生活において、「がんばるときには、がんばる。やるときには、やる。」と心がけています。将来、実家の肉用牛繁殖と養豚の経営を継いで、肉の品質を向上させ、県を代表する畜産農家になることが夢です。卒業後は農業大学校に進学し、今まで以上に詳しく農業の勉強をしたいと考えています。

私の実家は、高鍋町のとなりの川南町にあります。祖母は高鍋町に住んでおり、小学校時代に石井十次先生のことを教わりました。「縄の帯」などの逸話を話してくれました。そのときの感想は、心の優しい人といった程度のものでした。しかし、今回の発表にあたって、先生の60年の生涯について調べたところ、常に相手に対して思いやりの精神を忘れず、強い信念を持って孤児救済にあたった教育者・社会事業家としての姿が見えてきました。

私が感銘を受けたのは、若き日のキリスト教への入信に始まり、医学書を焼いて孤児救済に生涯をかけると誓った凄まじいまでの情熱があります。また、孤児との触れあいの中で常に子供達の視線に立とうとする人間的な奥深さ、印刷機の導入や音楽幻燈隊など最新の技術をためらうことなく導入する先進性なども感銘を受けました。さらに、農業高校に学ぶ私としては、先生が自然を主体として、多くの孤児と共に茶臼原の大地を開拓されたその精神には大変心ひかれるものがありました。

畜産科の同級生や、先輩、後輩、生徒会役員など私にはたくさんの友達がいます。テスト期間中などは起床時間よりも早く起き、友達と眠い目をこすりながら勉強します。また、行事の運営などでは、話し合いを重ね、アイデアを出し合って、成功に導きます。昨年度末のクラスマッチでは私たちが主体となって素晴らしい行事にすることができました。これからは、その友達に対して常に思いやりの精神を忘れず接したいと思っています。また、人間的な奥深さを身に付けるために、あらゆる面で学ぼうとする意欲を持ち、自分を向上させることが大切だと思います。分らないことがあったらまわりの人に質問したり、文献などで調べ、何にでも興味を持ち、情熱をもって取り組みたいです。そして、専門の授業・実習で最新の技術を学び、導入することができるような先進性を身に付けたいです。さらに、自然環境に配慮した、環境にやさしい農業に挑戦し、農場を地域の方々に開放し、動物とふれあうことや、自然とふれあうことの素晴らしさを伝えたいです。学んだことを活かし、努力を惜しまず、牛の肉質を向上させ、県を代表する畜産農家になるという夢を実現したいと思っています。

私は今年、高校3年生になりました。卒業を1年後に控えた今、石井十次先生から学んだことを心かけ、残りの学校生活も1日1日を大切に、楽しく学び、高校生活を送りたいと考えています。



THE LIFE OF JUJI ISHII

Takanabe-higashi J.H.S.
3rd grade Saori Tanaka

When he was six or seven years of age, Juji was dressed by his mother in a new Kimono with a good belt for the harvest festival. "Now you look handsome! Why don't you go outside and play?" said his mother. Juji directed his steps toward the shrine, his heart beating with joy. A small boy was whimpering near the gate of the shrine. "What's wrong, Matukichi?" Juji asked. But he guessed from the way Matukichi was dressed humbly in a torn kimono with a rope for a belt that he was being snubbed by his friends. "Stop crying, Matukichi, I'll give you my belt." said Juji taking off his belt for Matukichi. And he led Matukichi over to his friends to join them and play.

In the evening Juji went home only to be asked by his mother what had become of his belt. Juji told her the truth honestly, through he feared that he might be told off for what he had done. But his mother gave him a gentle smile and said, "Is that right?" Good for you. Matukichi must have been very happy." His mother's response inspired Juji to begin his volunteer work.

It's now some seventy years since Juji's death, during which time great progress has been made in the Japanese welfare system. Now children are protected by a law called "The Juvenile Welfare Law" and those without parents are taken care of at care centers established by each municipal government. In chausubaru, also, there is a care center which was established in memory of Juji and fifty children are accommodated there. The supervisor at the place is Juji's great grandson. His name is Sojiro Kojima. Juji would be happy that his great grandson is still carrying on his work. Takanabe people will never forget Juji's spirit.

After I read the story about Juji I thought it's important to take care of others with a kind heart. We have to consider ourselves not an egotistic way of thinking but someone else view points. If we throw away egotism, kindness and happiness will shine through. If people all over the world wish other's happiness, bullying, ill-treatment and war will be gone.

石井十次の生きる道

高鍋東中学校 3年 田中沙織

6つか7つの頃である。秋祭りがきて、十次は母に新しい着物を着せられ、新しい帯もしめてもらった。「さ、格好よくなったわ。遊んでらっしゃい。」十次は、胸をはずませて天神様に向かった。鳥居のそばで、小さな子がしくしく泣いていた。

「あつ、松吉どうしたんだい。」松吉は、破れた着物を着て縄の帯を締めており、のけものにされているのだということがわかった。

「泣くのはおよし、松吉。僕の帯をやるから。」十次は、自分と松吉の帯をとりかえた。その後、松吉を連れて行ってみんなと遊んだ。

夕方、家に帰ると母に聞かれた。

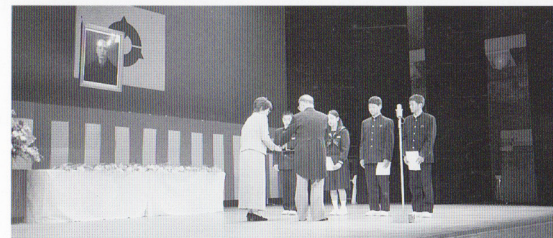
「あら、十次、帯はどうしたの？」十次は、しかられると思ってびくびくしていたが、正直に話を話した。しかし、母は優しく笑って言った。

「そう…。それは、よかったわね。松吉、喜んだでしょう。」十次は、自分も雲の様な喜びがわき上がってくるのを感じた。大きくなったら、自分がどういう人間になったらいいかを母に教えてもらったような気がした。

十次が永眠して以来、今日まで70数年の月日が流れた。その間に、日本の福祉は昔と比べると進んだ。現在では「児童福祉法」という法律があり、保護者のいない子ども都道府県が作った養護施設で手厚く育てられることになっている。

茶臼原にも、その施設の「石井記念友愛園」があつて、50の子をあずかっている。しかもその園長さんは、児嶋草次郎さんといって、十次のひ孫にあたる人である。十次は、彼のひ孫が、今も尚仕事を受け継いでいてくれており、嬉しいであろうと思う。十次の郷里である高鍋の人々も、人間愛に満ちた十次のことを決して忘れない。

私は、十次の話を読み終えて、優しい心を持って人を世話をすることの大切さを感じた。私達は自分自身のことだけにとらわれ自分本位に振る舞うのではなく、他人の立場でものを考えていかなければならない。もし私達は、わがままさを捨てることができれば、優しさや幸せに満ちてくと思う。もし世界中の人々が他人の幸せを願えたなら、いじめや虐待、戦争も無くなるのではないだろうか。





The Life of Juji Ishii

Takanabe-nishi J.H.S.
3rd grade Yukihiko Sakai

Juji Ishii was born in 1865, in Babanoharu, Takanabe Town, in Miyazaki prefecture. Juji was an ambitious boy and wanted to be naval officer so he went to a school in Tokyo called Kogyokusha. But, a year later he fell ill and was not able to fulfill his dream.

He returned to his village and decided to work on the barren land with his friends but a typhoon came and destroyed everything. He then changed jobs and worked as a secretary at the Miyazaki Police Office but even this job did not satisfy him. One day when he was sick, he met a doctor, Dodohei Ogiwara, who encouraged him to become a doctor.

When he was eighteen years old, Juji studied medicine and Christianity at the Koushu Medical Institute and went back to his hometown during the summer holidays. In his town he established a school called Babano-haru-asaban-school where young villagers could study. During the day they would work in the fields and then study together at night. Juji was greatly respected by all the villagers.

One day Juji found a boy and a girl dressed in shabby kimonos at the temple. They looked up at Juji with fear and anxiety on their faces. The instant Juji gave rice-balls to them, these children wolfed them down. That night their mother was also at the temple. She said to Juji with fear-filled eyes, "We are living our lives as beggars with no place to stay nor relatives to rely on. Wherever we go, people throw stones at us and make us go away. Sir, we can't keep on living this way. I implore you to take care of this boy." Juji went home, his heart was full of sympathy. "Shinako, my dear, can't we do something for them?" Juji said to his wife. She answered in a compassionate tone, "Just one boy would not be too much trouble!" They decided to adopt the boy named Sadaichi and bring him up.

More and more people heard about this and Juji was asked to look after many children. He did not have the money or the space so he asked his friends in medical college to help him. Every month they sent him money and Juji set up the "Orphan Education Association".

Thanks to Juji, many changes have been made to the Japanese welfare system. Children are protected by laws and those without parents are looked after in care centers. Juji's statue can be seen in Takanabe town. The people in Takanabe will never forget Juji's spirit.

『英訳 石井十次物語』より

高鍋西中学校 3年 酒井幸彦

石井十次は、1865年、宮崎県高鍋町馬場原で生まれました。十次は野心のある少年で、海軍士官になりたいと思っていたので、攻玉舎という学校に入りました。しかし、1年後、彼は重い病にかかり夢を果たすことができませんでした。

彼は村に帰り、友人と共に荒地を開墾しようと決めたが、台風が来てすべてを流してしまいました。それから彼は仕事を変え、宮崎警察署で書記として働きはじめましたが、この仕事さえ彼を満足させることはできませんでした。ある日、彼が病気がかかったとき、荻原百々平という医者に出会い、彼は十次を医者になるよう励ましてくれました。

18才のとき、十次は甲種医学校で医学とキリスト教を学び、夏休みには故郷に帰りました。故郷では「馬場原朝晩学校」という学校を設立し、村の若者たちはそこで学びました。日中は田畑に出て勉強し、夜は共に学びました。十次は村の人々に大変尊敬されました。

ある日、十次は寺でほろをまとった男の子と女の子を見付けました。彼らはおどおどとして不安そうな目で十次を見上げました。十次が彼らにおにぎりを差し出すと、彼らはうはいとるようにして、平らげました。その夜、その寺に彼らの母親が現れました。「わたしたちは、家も身寄りもなく物をいをしています。どこへ行っても石を投げ付けられて追い払われてしまいます。このままでは生きていけません。どうか、男の子だけでもあずかってください。」十次はどうかしてやりたい気持ちで家に帰りました。「品子、なにかできないだろうか。」十次は品子に相談しました。彼女は哀れに思い答えました。「男の子だけならなんとかなりますよ。」彼らはその定一という男の子を引きとり育てました。

多くの人々がこのことを聞き、十次はその後、たくさんの子どもの世話をしました。彼はお金も土地もなかったので、医学校の友人に助けを頼みました。彼らは毎月お金を送り、十次は「孤児教育会」を設立しました。

十次のおかげで日本の福祉が大きくなりました。子どもたちは法律によって守られ、親のない子どもたちは養護施設で育てられます。十次の像は、高鍋の町に見ることができます。高鍋の人々は十次の精神を忘れることはないでしょう。

